

コミュニティ FM を活用したダム情報の提供と 地域連携の強化

川崎 忠成

独立行政法人水資源機構荒川ダム総合管理所 総務課長 (〒369-0014 埼玉県秩父市荒川久那 4041)

荒川ダム総合管理所は、令和元年9月にコミュニティFMであるちちぶエフエムと防災協定を締結した。2019年10月に東日本に甚大な浸水被害をもたらした台風第19号では、防災協定に基づきダム放流に関する通知内容がラジオで放送され、また、番組を通じて水関連災害に関する啓発を行った。このことを契機としてコミュニティFMを通じた情報発信を強化し、併せて地域連携の強化を図っているものである。

キーワード コミュニティエフエム、防災協定、プッシュ型の情報提供、地域連携、継続性

1. はじめに

独立行政法人水資源機構荒川ダム総合管理所(以下「荒川ダム総合管理所」という。)は、秩父地域を対象とするコミュニティエフエムとして設立されたちちぶエフエム株式会社(以下「ちちぶエフエム」という。)と2019年9月12日に災害情報の放送に関する協定書(以下「防災協定」という。)を締結した。本稿では、防災協定締結の経緯、協定書に基づき同年10月に東日本の広範囲にわたって甚大な浸水被害をもたらした台風第19号への対応時におけるラジオ放送の実績、防災協定書締結を契機とした展開に加え、これらの成果と今後の展望について紹介する。

2. 防災協定締結の背景及び目的

2018年の西日本豪雨を契機として同年12月に異常豪雨の頻発化に備えたダムの洪水調節機能に関する検討会において「異常豪雨の頻発化に備えたダムの洪水調節機能と情報の充実に向けて」と題した提言がなされた。これを踏まえ、荒川ダム総

合管理所においても提言を踏まえた検討を行っていたところであるが、2017年の九州北部豪雨では、雨音でサイレン音さえよく聞き取れなかったという声を直接住民から聴いた経験があり、確実な情報の伝達方法を模索していた。

このような折に、秩父地域を対象とするコミュニティエフエムが設立されつつあるという情報を得た。さらに、秩父市では各戸に防災ラジオが貸与されて設置されており、防災情報のほかAM・FMラジオ放送を聴くことができる状況にある。防災ラジオは室内の至近に音源があることから、台風や大雨の場合でも明瞭な音声で正確に情報を得ることができる。

荒川ダム総合管理所は、このような状況や地域の特性に点に着目し、提言にある「プッシュ型配信等を活用したダム情報の提供の充実」を具体的に実現できるものと考え、ちちぶエフエムとの間でラジオ放送を通じたダム放流情報等の提供に向けた調整を2019年4月より開始した。

ちちぶエフエムは地域活性化のみならず、地域防災メディアとしての役割を果たすべく設立されたものであり、地域のあらゆる防災情報を地域住

民へ直ちに確実に届けるという点で双方にベネフィットがあることから、協定締結に向けた調整はスムーズに進んだ。また、秩父市の中心を流れる荒川に関する防災情報は地域の防災に関して極めて重要であることから、荒川本川上にある国土交通省関東地方整備局二瀬ダム管理所（以下「二瀬ダム管理所」という。）とも連携をして、三者で防災協定を締結することとしたものである。

表-1 防災協定の概要

- ダムからの放流を行おうとする場合など、荒川ダム総合管理所は防災情報をちちぶエフエムに提供するとともに放送を要請する。この要請があった場合、ちちぶエフエムは、通常の番組に優先して災害情報を放送する。
- 要請に基づく放送に関しては無償
- 要請は原則として指定様式をもって責任のある立場の者の承認を得て行う。
- 災害時の対応に備えるため、平時より相互に協力するとともに、荒川ダム総合管理所が行う防災訓練に参加し、防災知識の普及促進活動にも協力する。

なお、防災協定書の締結時期については、新聞報道等されることにより他の関係機関等との防災協定の締結を促し、また、ちちぶエフエムへの地域の関心が高まるという触媒効果をねらい、開局前に行うものとした。なお、ちちぶエフエムと秩父市の間で2020年2月8日に「防災・防犯情報の緊急放送に関する協定」が締結されている。

3. 協定締結を通じた実際の対応等

1) 台風第19号対応

防災協定の締結は9月12日に「逃げ遅れゼロ」というキャッチフレーズのもと荒川ダム総合管理所にて行った。秩父記者クラブ加盟各社が協定締結式取材し、朝刊の記事として地元紙及び業界紙に掲載され広く紹介された。



写真1：協定締結式

ちちぶエフエムは10月7日に開局し、毎日午前7時から午後9時まで12時間の生放送により秩父地域に即した鮮度のある情報発信を行い始めた。しかし、開局したまさにその週に台風第19号が東日本を直撃するコースを進むことが予測され、これに伴いダム放流を行うことが想定されたため、ちちぶエフエムに対し防災協定に基づいた防災情報の通知を行うことが見込まれた。このため、10月10日に荒川ダム総合管理所職員が放送局を訪れ、実際に放送するパーソナリティーに対し洪水時のダム操作とダム放流に関するFAX情報の見方について説明を行った。さらに、台風上陸が目前となった11日には、ちちぶエフエムのお昼の番組に職員が生出演し、ダムから放流を行う際のサイレンや放送について説明を行い、河川には決して近づかないよう放送を通じてリスナーに対してお願いした。

台風が上陸した12日のちちぶエフエムの放送は、特別番組として放送開始から防災情報を放送し続け、ダム管理所から送信されたダム放流情報についてもその都度放送された。また、大雨により秩父地域でも至る所で土砂崩れが発生したが、交通情報や避難所開設情報など地域に密着した地域住民に必要な情報が放送され続け、プッシュ型の情報提供が秩父市民を中心とするリスナーへなされ続けた。

2) 台風第19号対応を振り返った座談会

台風第19号による大雨に関し、「秩父はダムによ

って守られた」と秩父市長のブログに評され、また、「台風 19 号による豪雨ではダムがとてものがんばってくれたので秩父地域は守られた。2019 年を振り返るにあたり、当時の緊迫した状況を含めダムの操作について番組で紹介してほしい」というテレビ番組への出演依頼もあったように、秩父地域ではダムに対する信頼度が大きく増した。このような背景から、ちちぶエフエムからは「ダムとコミュニティ FM 放送局の役割について台風 19 号対応を踏まえて振り返りたい」というラジオ番組への出演依頼がなされた。

この依頼を受け、荒川ダム総合管理所としては、人々の洪水への関心がまだ残っているうちに、また、台風第 19 号に関する報道では異常洪水時防災操作について「緊急放流」という言葉が浸透し、ダムに貯留した洪水を放流するかのような誤解が生じてしまっている現状を踏まえ、ラジオ番組において「座談会」という形式で台風第 19 号におけるダム操作を振り返り、異常洪水時防災操作について正しい情報を提供することを提案し、受け入れられた。

ちちぶエフエムでの座談会は 2019 年 12 月 5 日に同社スタジオにおいて、荒川ダム総合管理所長、二瀬ダム管理所長並びにちちぶエフエム磯田取締役及び山中キャスターによる対談形式で生放送された。対談は、台風第 19 号による豪雨とダム操作に関する緊迫した状況の説明、ダムからの放流と異常洪水時防災操作についての解説、そして、災害時におけるコミュニティエフエムの果たした役割と今後への期待について行われ、当初 20 分程度と予定していた放送時間を大幅に超過した約 50 分にわたり対談が行われ生放送で伝えられた。さらに、対談の概要は、ちちぶエフエムがフリーペーパーとして四半期ごとに発行している『ちちぶ FM Club MAGAZINE vol. 2』(2020 年 1-3 月号) に特集記事として掲載されており、ちちぶエフエムをはじめ、秩父地域の商店、飲食店など至る所で 10,000 枚が配布された。



写真 2：スタジオでの座談会の様子

4. 協定締結による効果と検証

1) ラジオ放送の効果

ちちぶエフエムから発信される台風第 19 号に関する放送は、秩父地域の住人にとってコミュニティエフエムの必要性を十分に分かしめるものとなった。ラジオの聴取率について統計データはないものの、リスナーからは「大雨や暴雨のため雨戸を閉め切っている室内では、防災無線の情報は非常に聞きづらいが、ラジオ放送はきれいに聞くことができた」との声が多く寄せられた。このことは、荒川ダム総合管理所がコミュニティエフエムを通じた情報発信を行うこととした理由のひとつであり、期待どおりの効果があったことが証明している。

2) 正確な情報の理解と伝達効果

台風第 19 号による豪雨では、熊谷地点においても洪水の危険が高まり一部地域では避難勧告も出された。このため、熊谷エリアをカバーするちちぶエフエムとは姉妹関係にある「FM クマガヤ」からちちぶエフエムに対し、荒川上流におけるダム操作の状況、特に、いわゆる緊急放流についての問い合わせが数回あったとのことである。

この問い合わせに対し、ちちぶエフエムは、異常洪水時防災操作はダムにためた水を流しているのではないこと、ダムは洪水調整を行って効果を発揮していることを説明し、秩父地域外においても正確な情報を伝えることができたことである。事前の説明と丁寧な対応が功を奏した形となった。

3) ラジオ放送はどれくらいの人に聴かれているか。

ちちぶエフエムがどの程度地域住民に聴かれているか確認するために、2019年12月に荒川ダム総合管理所とちちぶエフエムとのコラボ企画を実施した。この企画は、①イベント開催前2日間にイベントの告知をラジオ放送と荒川ダム総合管理所のツイッターで行い、②イベント会場で「ラジオ放送を聴いてきた」という方にコラボグッズを先着30名に差し上げる、というものであった。コラボ企画についてラジオの放送で1日数回2日間の告知がなされ、当日はちょうど30名の来訪者があった。まさに秩父市内のコアなリスナーが集まった形となったが、秩父市民に着実に情報が届いていることが確認できた。

5. 展望と今後の展開

前述のようにちちぶエフエムとの防災協定を契機とする各種の活動は、地域の関係機関との連携やちちぶエフエムの活動支援等の面においても良好な結果が残せたと考えている。しかし、年が明けて令和2年の洪水期を迎えるにあたり、新型コロナウイルス感染拡大によって台風第19号の洪水被害の記憶が薄れていくなかで、継続性のある意識啓発の取組が課題となっている。

このため、ちちぶエフエム開局当初より毎週水曜日午前11時より荒川ダム総合管理所から洪水に対する意識啓発をするためのCMを季節ごとに内容を変えて放送している。さらに、『ちちぶ FM Club MAGAZINE vol. 3』（2020年4-6月号）において「ダムを知ろう」という特集記事を掲載した。ここでは、滝沢ダムの内部構造や洪水吐きゲートの役割等の紹介した上で、洪水期に向けて管理所として実施しているダム洪水対応演習を行って洪水備えていることと併せて、これから洪水期を迎えるにあたり「命を守る行動」をとってもらえるようなお願い（具体的には、サイレンが鳴ったら川には近づかない、川の様子を見に行かない等）を掲載している。



図1: Club マガジン第3号(令和2年3月発行)

日本全国を見渡せば、河川国道事務所や自治体とコミュニティエフエムが防災協定を締結している事例はすでに存在する。スマホの時代ではあるものの、いわゆる「情報弱者」と呼ばれる高齢者世帯等もっとも災害情報を届けなければならない方々に対し、自治体がラジオを貸与しているような場合は、コミュニティエフエムを活用した防災情報の一環としてのダム放流に関する情報の提供は、既存の放流警報局からのサイレン吹鳴等の効果を補強するものとして効果的であると思われる。

防災協定の内容は全国的に同じものとなるが、協定締結や協定に基づく情報提供にとどまることなく、協定締結を契機として放送局や関係機関との関係性を構築してダムを通じた「地域連携」を行い、その関係を維持していくこと、つまり「継続性」が、防災情報を正確に地域住民に届けるだけでなく、地域振興の面でも重要である。地域の住民にとっては、迷惑施設とともられるダムであるが、荒川ダム総合管理所として、地域に根ざしたコミュニティ放送局を通して、様々な、そして鮮度のある情報を「継続的」に耳にしてもらうことで、ダムが地域の仲間として認知されることを期待している。さらには、秩父地域を守り、荒川下流域をも守る地域住民の誇りとなる施設へと昇華されるよう、日々の管理業務に努めてまいりたい。